

社団法人日本超音波医学会第78回学術集会を終えて

会長 菅原 基晃 (東京女子医科大学附属日本心臓血圧研究所基礎循環器科)

社団法人日本超音波医学会第78回学術集会を、2005年5月20日-22日にかけて東京国際フォーラムで開催し、無事終了いたしました。

開催に当たりましては、アドバイザー6名、委員29名、オブザーバー1名からなる学術集会実行委員会を組織し、準備に取りかかりました。実行委員会の先生方には、企画の段階から、最後のプログラムの作成にいたるまで、大変な時間と労力を使っていただきました。今回の学術集会を無事に終えることができましたのも、すべて実行委員会の先生方のお陰と、心から感謝申し上げます。

キャッチフレーズを「画像と機能の超音波」といたしました。これは鮮明な画像を得ることだけではなく、もともと超音波装置が収集してはいるが必ずしも有効に利用されてこなかった信号(組織ドプラなど)を有効に活用して、心機能、血管弾性、組織弾性などの動的な指標の定量的な情報を得ることも、超音波機器の一つの発展の方向であるという考えからです。この趣旨に沿って、シンポジウム「ストレイン(1) Tissue Elasticity Imaging」、ライブシンポジウム「ストレイン(2) 心筋 strain」、国際シンポジウム「Wave Intensity」を企画していただきました。

また、画像の3次元化と超音波の治療への応用は、今後の重要な発展の方向と考え、シンポジウム「3D

画像の進歩」、シンポジウム「超音波治療の現状と将来」を企画していただきました。

各領域のトピックスに関しても、腹部のシンポジウム「腹部超音波診断の新技术」、産婦人科の二つのシンポジウム「子宮頸管の超音波所見とその臨床的意義」、「胎児心機能評価—特に心不全をどう評価するか」、泌尿器科のシンポジウム「前立腺癌における超音波医学の進歩」、血管エコーの二つのシンポジウム「頸動脈超音波—診断治療への応用」、「血管エコーの標準化」を企画していただきました。

この他に、ワークショップ、パネルディスカッション、オーガナイズドセッションも多数企画していただきました。いずれの企画も盛会でしたが、特に血管エコーに人が多く集まっていたのは、時代の流れかと感じました。

超音波医学は、何と言っても、技術の進歩に支えられています。技術の進歩がないと、超音波医学は停滞しますが、新しい技術が現れると急に活気づきます。今回の学術集会では、このことを医学系、理工学系、エンジニアの全ての方々に再認識していただくために、展示デモ：フロンティア・テクノロジーという新しいプログラムを企画いたしました。これは、機器展示会場に150席の椅子席と舞台を設け、ここで各社の最先端技術について、学術発表をしてもらおうというものです。学術発表ですから、当然、演者と演題と発表時間

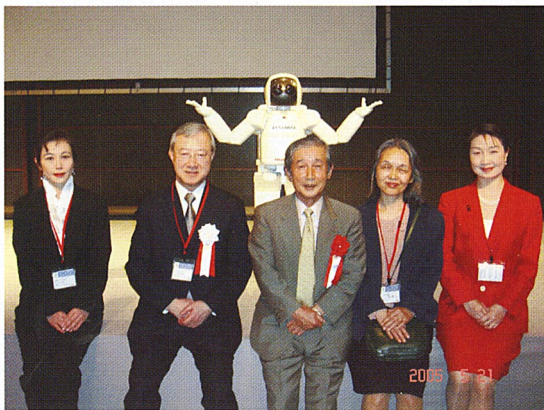


写真1 ファイヤサイドトーク会場にて、前列中央は本田技研工業前社長吉野浩行氏、後ろはアシモ



写真2 ポスター会場風景

はあらかじめプログラムに載っています。演者を誰にするかは、各社にお任せしてありましたので、自社のエンジニアの場合もあれば、外部のエキスパートの場合もありました。演者は学術講演の発表者ですから、参加登録をしていただき、登録料もいただきました。座長は実行委員会で指名いたしました。今回は、6社が発表の意思を表明いたしましたので、3日間に各社に1回30分で3回の発表をお願いいたしました。発表の内容は、毎回異なるものです。

各社とも、それぞれの最新技術について、専門的な発表を行いました。座席は毎回ほぼ満席で、超音波医学会の会員はやはり技術の進歩に強い関心を持っているのだということを再認識いたしました。

このプログラムは好評で、学術集会終了後も、いろいろな方からお褒めの言葉をいただいております。

教育セッションは、学術集会の重要なプログラムの一つですが、企画するのは日本超音波医学会の教育委員会です。今回は、教育セッションが行われる2日間を通じて、会場は一つ、収容人員500名以上という教育委員会の強い要望を受けて、600名の会場を用意いたしました。教育委員会が力を入れているだけあって、会場はいつもほぼ満員の状態でした。

懇親会の来賓の一人に、本田技研工業の元社長吉野浩行氏を迎え、本田自慢のアシモを連れて来ていただきました。アシモのパフォーマンスは、皆さんに十分楽しんでいただけたと思います。

座長を努めていただいた先生方に、アンケートへの

回答をお願いいたしました。回答をみて、反省した点はPCセンターです。私自身、PCセンターでは、たびたび不愉快な思いをしています。やたらに待たされたあげくに、パソコンの中味をぐしゃぐしゃにされたり、PCセンターのモニターには写ったのに、会場のモニターには写らなかったり、といったことを何度か経験しています。そのため、私自身はPCセンターへは寄らず、会場のモニターに直行することになっています。今回も、私はPCセンターはいらないと主張したのですが、コンベンション会社がいろいろと必要性を述べて、どうしても置いてくれと懇願するので、つい置くことに同意したのですが、結果はさんざんの不評でした。今後は、メモリースティックやCD、ポータブルハードディスクでの受付を認める方向に切り替えた方が、かえって混乱が少ないのではないかと思います。

今回の学術集会には、参加登録者3000名を期待いたしておりましたが、実際には約3500名の参加登録者があり、数の上では成功だったと思います。地震、台風、等の非常事態に備えて、ロイズのイベント保険にも入りましたが、3日間を通じて雨さえも降らず、大変幸運でした。閉会を宣言した後、後始末がほぼ終わるの見届けて、会場を離れようとした丁度その時小雨がぱらつき始めました。まるで、この学術集会が終わるのを待っていたかのように、ラッキーだったなーと、急にうれしくなりました。